

シンポジウム報告「学祖研究の現在」

下田歌子研究所 主任研究員
伊藤 由希子

2015年11月21日(土)、下田歌子研究所シンポジウム「学祖研究の現在」が、渋谷キャンパス創立120周年記念館403教室で開催された。

はじめに田島眞実践女子大学学長・短期大学部学長から開会の挨拶があり、昨今の大学改革の流れの中、学祖研究はますます重要になってきており、本学でもグランドデザイン策定委員会を設けて建学の精神の見直しをしていることもあって、本シンポジウムに大きな期待を寄せていることが述べられた。この後、湯浅茂雄氏(下田歌子研究所所長)、竹村牧男氏(東洋大学学長)、勢力尚雅氏(日本大学教授)、片桐芳雄氏(日本女子大学名誉教授)の各パネリストからの提題があり、コーディネーターを伊藤がつとめた。



湯浅 茂雄 氏

主催校として最初に登壇した湯浅氏は、「女性が社会を変える、世界を変える」というテーマで、下田歌子の伝記を親しみやすく漫画化して出版した『きらりうたこ』の学祖紹介の事業などを紹介しつつ、下田歌子の教育者、歌人、国文・国語学者、家政学者、社会福祉事業家としてのマルチな活躍について

ふれ、たとえば下田が故郷を出る際に詠った「綾錦着て帰らずば 三国山 またふたたびは 越えじとぞ思ふ」という歌の精神などに実践女子学園の原点が見られること、また、「帝国婦人協会設立主意書」の「揺籃を揺るがす手は以て能く、天下を動かすことを得べし」の意図を汲んで、今年度から「女性が社会を変える、世界を変える」という言葉を建学の理念として発信することになったということなどについて述べた。さらに、下田が実践女子学園のみならず、世界の女子教育がよりよいものとなることを願っていた精神を継承すべく、下田歌子研究所がどのような取り組みを進めているかを研究所の事業計画を具体的に示しながら紹介した。



竹村 牧男 氏

次に竹村氏は「東洋大学における井上円了研究の現状」という題で、私立哲学館大学を創りながら、全国を回って七千回以上と言われる講演活動を行った井上の人生の紹介から、彼が三度の世界旅行で見聞したことを通して、教育による人物の養成ということを重視するに至り、当時の日本では一般的に教育の基礎が経済学や法学といった実学に置かれていた

のに対し、哲学をベースにした教育を展開するという、当時としては画期的な哲学館の教育方針を作り上げていった経緯を説明した。そしてこのような井上の考えから、東洋大学は教育理念として、「諸学の基礎は哲学にあり」「知徳兼全」「独立自活」を掲げているが、これらは今日の高等教育界で重視されている「何を知るかよりも、何ができるようになるか」ということにも合致し、その意味で井上の教育理念は、まさに今日の教育の潮流を先取りしたものと言えること、そして現在進行中のカリキュラム再編でも、基礎教養教育科目はむしろ、専門科目にもそれに関わる哲学科目を置くことで、常識や流行にとらわれずに深く考える訓練ができるような取り組みを進めていることを紹介した。さらには、法人立の「井上円了研究センター」を設置し、それを母体に「国際井上円了学会」を立ち上げ、国際的連携の中で井上研究を進めていることなど、研究体制の現状についても報告した。



勢力 尚雅 氏

三人目の勢力氏は、「山田顕義の「人間の条件」—日本大学の建学の精神のかたちと変遷をたずねて」というテーマで、日本大学の建学の精神として挙げられている「日本精神」と「個の尊重」という相容れないようにも見える二つの理念、そして新教育理念として「自主創造」という言葉を、学祖・山田顕

義の人生や言葉から整理し、理解しなおすことであらためて位置づけられることを論じた。山田は明治の司法改革に取り組んだ中心人物であるが、その際に山田が、西洋のものを右から左に持ってくるのでは、日本人の風俗・文化や人情の中に根付いていかない、よって日本人の「数千年の習慣風俗」をあらためて観察し、日本人に合ったかたちの憲法を制定・運用しなければならないと考えたこと、また、国民に憲法を一方向的に押し付けるのではなく、時間をかけてきちんとその理を理解させようとしていたことなどに、「日本精神」と「個の尊重」とを並び立つものとして理解できるであろうと指摘した。そしてまた、こうした新たな生き方を試行錯誤し続けるということこそが、山田の考えた「人間が万物の最たるものである条件」であって、その背景には1844年に萩の藩士の家に生まれ、吉田松陰の松下村塾に学び、また大村益次郎から洋式兵学を学ぶなど、激動の時代を生きた山田の経験があり、そこから「自主創造」という理念を位置づけることも可能であろうと論じた。

最後に登壇した片桐氏は、「日本女子大学と創業者成瀬仁蔵」という題で、日本女子大学で現在も行われている創業者・成瀬を偲ぶ年間行事や、成瀬・日本女子大学研究に対する学内の研究支援体制（研究助成・出版助成など）について紹介した後、このように成瀬を顕彰している学内においても、崇拜者と嫌悪者と無関心層があり、それをまとめていくことの難しさを述べた。しかし、一般的に言われるような「国際化」などの言葉ではその大学にふさわしい理念を打ち出すことはできず、やはり創業者の言葉に立ち戻らざるを得ないことを指摘し、日本女子大学を含め、明治時代に創られた女子大学のほとんどが「良妻賢母」を育てるとしていたが、成瀬は「女子を先ず人として、第二に婦人として、第三に国民として、教育する」（『女子教育』）と言って、女性は一生涯においてその役割・あり方がいろいろに変化して



片桐 芳雄 氏

いくのであるから、まずは人としての教育を考えることが大事であると述べており、そうしてみれば、百年後の今でも活かすことのできるこのような考えを現在にどのように受け継いでいくかを学生や社会に対して説明できるようにすることが、学祖研究の真の目的であろうと論じた。

以上の各提題を受けて、後半のパネルディスカッションでは、四つの論点についてあらためて各氏の意見をうかがった。一つ目は、学祖や建学の精神を研究する際に、具体的にどのような方法を採用のがふさわしいと考えられるか、また、現代的視点からの批評的研究と、当時の時代背景をふまえての研究とでは当然さまざまな違いが出てくるが、それらをどう繋ぎながら考えるかという点、二つ目は、さまざまな学祖理解や評価が学内にある場合に、大学として統一見解を出していくべきかという点、三つ目は、自校教育を進めるとなると学内の協力やコンセンサスが必要であるが、その際にどのような注意・配慮をすべきかという点、四つ目は、そもそも官学とは異なる教育として始まった私学教育を、今後どのように進展させていくべきかという点である。湯浅氏は、下田が目指したものをカリキュラムに落とし込む段階にはまだ至っていないが、学生が女性の生き方のモデルとしての下田に学べるようなものを考えたい旨の構想が述べられ、竹村氏は、時代背景

もあって井上にも光と影の両面があるが、その思想の中から、未来を先取りするような、あるいは普遍の真理とも言えるような重要な点を抽出していき、現代に活かしていくために、時に学祖の言葉の現代的な読み替えをしながら、大学としての統一見解を出していくことも必要であろうと論じた。勢力氏は、「自主創造」という理念を活かすためには、学祖の残した言葉やその時代の精神を、学内の統一見解として無難なかたちやイデオロギーにまとめあげるのではなく、教員や学生が自分自身で考える試行錯誤こそが重要なのではないかと提案し、片桐氏は、創立者を客観的に研究したその上にこそその顕彰もあるべきで、根拠のない神格化はあってはならない、そのためにも、成瀬仁蔵を個人としてよりも、その時代の中において研究するというを現在進めたいと述べた。

時間の制約もあり、十分な議論を尽くすことはできなかったが、現在多くの私立大学が学祖や建学の精神を見直し、立ち返ろうとしているその方法や問題点などをあらためて考えてみようというおそらく初めての試みであったということ、また、来場者からの反響の大きさを考えると、本シンポジウムの意義は小さくないものであったと思われる。下田歌子研究所では、今回の議論で浮き彫りになった課題を、今後さらに継続的に考えていく場を設けていきたいと考えている。



静の舞

—鎌倉時代と下田歌子—

東京理科大学 講師

佐藤 雅男

I. 八幡宮の舞殿

例年8月7日から三日間、鎌倉の八幡宮で、ほんぼり祭がある。夏越え、立秋と続き、最終日が実朝祭である。三代将軍の実朝は、建久3年(1192年)8月9日生まれである。昨年夏の夕暮れ、横浜に住む私は、久しぶりに実朝祭に行ってみた。まだ壇蔓は工事中で、境内の三の鳥居の参道沿いに、鎌倉在住の人々が、紙張りの行灯に描いた書画が並んでいる。辺りを歩くうちに日は沈みかけた。そういえば実朝に、「くれなるの千入ちしほのまふり山の端に日の入る時の空にぞありける」の歌があった。行灯に蠟燭が灯り、どうやら19時から舞殿で琴の演奏があるらしい。そこで路地裏の珈琲店で時間を待ち、倒れた大銀杏の幹を右横に、その宵は八幡宮の石段に座って、女性二人による琴の演奏を聴いた。

普段は余り聴くこともないが、琴の音色には、どこか寂しい、しかも懐かしいような響きがある。正面の舞殿は、その昔、静御前が義経への恋慕の情を歌った場所である。静は義経と一緒に京都から吉野へ行き、別れた後で捕まり、文治2年(1186年)3月に母の磯禪師と鎌倉に送られた。そして4月8日、頼朝夫婦を前に舞を奏した。白拍子の伴奏には鼓や笛などが用いられた。

II. 『日本の女性』の思想史

静の舞の話は、下田歌子の『日本の女性』にもある。この著作は1913年が初版で、20年後に著作集の『香雪叢書 第三巻』として増補改訂版が出た。著作の全体は、十二章と各節で構成され、近代日本で初めて試みられた、女性による女性の思想史である。下田は、女性史の流れは、神代から奈良時代までは「品位格式」が第一義で、平安に「品格趣味」が加わり、その情念偏重の時代が、鎌倉から明治時代に至るまで、「節義貞操」に変遷したと言う。静のことは、

第七章「鎌倉時代の婦人」の五節に、『吾妻鏡』『義経記』などを典拠に、「静女」として描かれる。

1182年に、天候不順の旱魃が続く。後白河法皇は二条の神泉苑で雨乞の祈祷をして、白拍子を百人集め、奉納の舞楽を催した。その時、15才の静の見事な舞に、天は俄かに曇り、雨が降った。その縁で、彼女は義経の側室になった。平家が滅びた後、頼朝と義経の仲は、呉越の関係になる。1185年に、頼朝は義経を殺すために、土佐昌俊を都に入れた。ある宵、昌俊は義経の堀河邸を襲ったが、静は警戒すべき宵である事を察し、直に義経の室に行き、鎧を着せ、邸内を駆け廻り、人々を呼び起した。昌俊は殺されたが、義経と頼朝の関係は、益々険悪になった。

義経は僅かの家来や静と一緒に、都落ちして吉野に行く。荒武者が兵を集め、恩賞に与ろうと攻めてきたが、此等を打ち破り、山の奥深く分け入った。もはや静と一緒にいく事は出来ず、吉野山で義経と別れる。義経は、静を無事に都に送る為に、黄金数枚と五人の雑色をつけたが、その無位の役人どもは黄金を奪って逃げた。雪の中に泣き倒れているのを悪僧に見つけられ、六波羅に送られた。その時、彼女は妊娠していた。それで母の磯禪師と共に、1186年3月に鎌倉に護送される。そして頼朝は八幡宮の舞殿で、日本一の白拍子の静に舞を奏するよう強請した。そうした催事は、頼朝の妻・政子の強い願望でもあったに違いない。

III. 恋慕の情と気概

4月8日の当日、八幡宮は、それを見に来た武士達で満ちていた。頼朝は政子と共に簾の中において、白拍子の登場を待っていた。『吾妻鏡』には、静は、直前まで舞いを躊躇したとある。それを、「御台所(政子)頻りに以て勧め申せしめ給」い、さらに政子は「大菩薩の冥感に備ふ可し」と促した。そして静は、「節義貞操」の気概を持って、舞殿に上がった。まず吉例として、君が代を寿ぐ舞を一さし舞った。一座は、そ



の軽妙な舞に見とれた。下田は次のように語る。

やがて第二の舞は初まろうと致しました。今度は定めて彼女が得意の舞曲であろうと、人々は眼を張って見て居りますと、静は悠々と座の正面に進みました。簾の中に瞬もせて見まもる武将の方にきつと眼を注いで、

吉野山峯の白雪踏みわけて入りにし人のあとぞ恋しき

更に又節を変えて、

しづやしづ賤のをだ巻繰りかへし昔を今になすよしもがな

と妙なる声を打ち上げて歌いました。言うまでもなく、郎君義経を恋い慕う歌であります。その声調は悲絶壯絶、そゞろに衆人の袖を絞らせました。

(『香雪叢書 第三巻』252頁、文字遣いなど旧字体を新字体に適宜変更した)

歌の本歌は、「み吉野の山の白雪踏み分けて入りにし人のおとづれもせぬ」(『古今和歌集』冬歌 壬生忠岑)と、「古のしづのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな」(『伊勢物語』32段 在原業平)である。二句目の歌の意味は、「静」を「倭文」(日本特有の文様を持つ織物)と掛けて、今、ここを義経が栄えた昔に戻したいの意味である。そこには、頼朝を侮辱して、みずからの命を捨てる覚悟がある。『吾妻鏡』によれば、頼朝は、「反逆の義経を慕い、別曲を歌うこと奇怪」と、静が抵抗したのを激怒した。それを政子が、「幽玄と謂うべし。枉げて賞翫し給うべし」と庇い、処刑を止めさせた。下田は、静に関して、次のように語る。

静の思想と行動とは、実に立派なものでありました。堀河夜討の時に処する態度の沈着さ機敏さ、又鶴岡社前に於ける舞曲の如き、言はゞ目に余る敵陣の中へ、单身徒手にして入った様なものであったにも関わらず、死を見ること帰するが如く、時の主権者たる武将を眼の前に於いて、

冷然淡然、一条も乱れぬ舞の手振、歌の整調に、其の敵たると味方たるとを問はず、見聞く者をして覚えず襟を正さしめ、且同情の涙の滂沱たるを禁じ得ざらしめしが如きは、有髯の男子と雖も為し易からざる所であります。(254頁)

静という白拍子には堅実なる意志があり、「節義貞操」のためには死をも恐れなかった。これは武士の気風が、おのずから女性にも染み込んで、その女性らしさを失うことなく、男性と並び立つような気概を示した事例である。この時、20才の静は、7月に子を生んだ。不幸にも男子で、由比ヶ浜に流された。義経の奥州での戦死の知らせがあり、10月に京都の天龍寺の傍らに庵を結んだ。

その後の静の消息に関しては、日本各地に残る伝説を頼りにするしかない。香川県さぬき市の長尾寺の境内に、苔むした五輪塔がある。そこには「静御前剃髮塚」の立札があり、庵には静御前の位牌が祀られている。その表面は《春月妙誉正光 位》、裏面には《建久三年 三月十四日》と書かれている。1192年3月14日、静は短い命を終えた。享年24才である。

後白河法皇も1192年4月に崩御し、7月には、頼朝が征夷大將軍になる。頼朝は45才、政子35才で、同年8月9日に実朝が生まれる。最近の日本史では、1185年に、頼朝が国ごとに守護、莊園や公領ごとに地頭を設置して、鎌倉幕府の成立とされる。他にも諸説あるが、1186年の静の気概を持った抵抗には、頼朝は余裕もなく激怒した。その時、義経はまだ生きていた。そして1192年頃の、時代を象徴する人物の生没に思いを馳せれば、その年は、やはり画期的な年であることに変わりはない。

季節は廻って、例年4月の第二日曜の「鎌倉まつり」には、舞殿で「静の舞」が奉納される。昔には決して戻れないが、今も、一つの時代の音調や色彩は持続する。下田歌子は、『日本の女性』で、その凜とした静の舞の手振りを描いたのである。

下田歌子先生 世界一周教育視察 ②

下田歌子研究所
奥島 尚樹

—序—

下田歌子先生が実践女子学園を創設する契機になったとも考えられる欧州教育視察について、旅程や移動手段についての調査を継続している。

ニューズレター第5号では、日本からの出国及び日本への帰国についての調査結果を報告した。今回は、イギリスから大西洋を経て帰国の途につくまでの経路で新たな資料を見つけることができたので紹介したい。

—英国を出港—

今回は英国から北米大陸に移動した手段についての調査結果を中心とする。どの港から出港し、どの港に到着したかが不明であったことから、大西洋航路における英国及び北米大陸の主たる港をあたることとした。下田先生の記録を見つけるまでに想像していたよりも多くの資料を読む必要があり、想定より多くの時間を必要とした。

また、調査に際しては主としてオンラインのデータベース“Findmypast.co.uk”を使用した。必要に応じて外交史料館等国内の公的機関も利用している。

“Findmypast.co.uk”の調査の結果は下記の通りである。

Passenger Lists leaving UK 1890-1960 Transcription	
First name(s)	-
Last name	SHIMODA
Title	MISS
Gender	Female
Age	ADULT
Marital status	S
Occupation	LADY
Departure year	1895
Departure day	4
Departure month	7
Departure port	LIVERPOOL
Destination port	MONTREAL
Destination	MONTREAL
Country	CANADA
Destination country	CANADA
Ship name	LABRADOR
Ship master's first name	JAMES
Ship master's last name	MCAULEY
Shipping line	DOMINION LINE
City	LIVERPOOL
Ship destination port	MONTREAL
Ship destination country	CANADA
Ship square feet	5902
Ship registered tonnage	2998
Number of passengers	251
Record set	Passenger Lists leaving UK 1890-1960
Category	Travel & migration
Subcategory	Passenger lists
Collections from	Australasia, Great Britain, Ireland, United States
Transcriptions © brightsolid online publishing ltd	

図1：Findmypast.co.uk 調査結果

下田先生がリバプール港（英国）を出港（出国）したのは1895（明治28）年7月4日であることが記載されている。また、目的地はカナダのモントリオール港となっている。乗船は「ラブラドル（Labrador）号」（総排水量 5,902トン）船主は“Dominion Line”。乗船していた人数は251名となっている。

この記録が下田先生の移動と一致すると判断したのは下記の理由による。

- 1895年の同月同日に英国を出国した“Shimoda”の名前、日本人、女性、の記録はこれだけであった。
- アメリカ大西洋側の港の入国記録を調べたが、“Shimoda”の名前、日本人、女性、の記録は発見できなかった。
- 移動の年月日が下田先生のヨーロッパでの活動及び帰国日時から見て、妥当と思われる範囲内であった。



図2：ラブラドル号（GC Archives より引用）
英国船籍（総排水量4,737トン 3デッキ）。船主は“Mssppi & Dominion S.S.Co. (Lim.)”、船種は客船。＊船の詳細については“Lloyd’s Register”より

図3は、調査結果の裏付け資料としてダウンロードしたもので、リバプールで保管されている乗船記録簿（1895）である。これは出国者の一覧となるものであり、乗客が乗船したかどうかを確認するためのリストとなる。もし万が一何か事故等が発生した場合は、出港した港としてこの名簿が役立つこととなる。

図3の乗船記録簿には、“Cabin”の記載があることから、おそらくは一等船客として乗船したことがうかがえる。

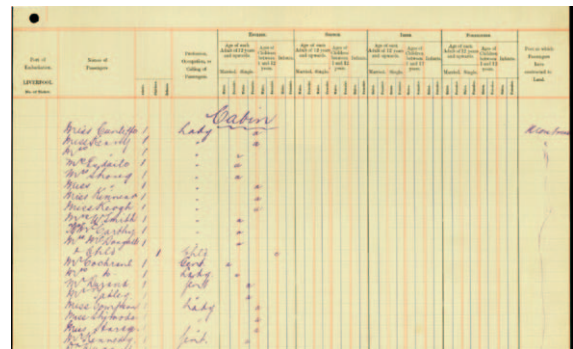


図3：Liverpool の乗船記録簿（1895）

—カナダ到着—

リバプールを出港した日付は分かったが、カナダ到着の日付が同データベースでの調査結果では確認できないことから、今回はカナダ側の調査を行った。

船名と出港日付が判明すれば、調査は比較的早く展開する。今回は“Library and Archives Canada”が提供している“Passenger Lists, 1865 - 1922”を使用して調査を実施し、ラブラドル号の1895年乗船名簿をダウンロードして入手した。

右（図4）は「ラブラドル号」の乗船名簿の表紙とその記載内容である。

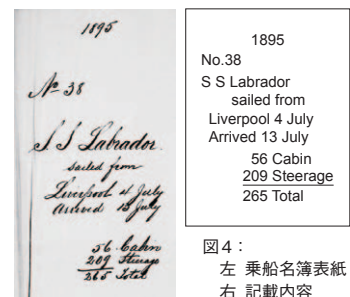


図4：
左 乗船名簿表紙
右 記載内容

図5は乗船名簿のオリジナルヘッダーで、船客の情報として必要となる事項が記載されている。

記載事項は、船名、排水量、出発した港、到着予定港を基本とし、氏名・大人[年齢(性別)]・子ども[年齢(性別)]・職業・国籍・目的地、となっている。手書きで、旅券など確認資料をもとに作成されており、全乗客分を短時間で処理しなければならず、大変な作業であったことが推察される。

SCHEDULE A. PARTICULARS RELATIVE TO THE VESSEL.					
VESSEL NAME	MASTERS NAME	TONS NET	FROM WHAT PORT	TO WHAT PORT	WHERE BORN
<i>Miss Shimoda</i>	<i>San P. Bailey</i>	<i>2998</i>	<i>London</i>	<i>London</i>	<i>London</i>
NAMES AND DESCRIPTION OF PASSENGERS.					
Part of Description	Name of Passenger	Age	Sex	Profession, Occupation of Parents	Place of Birth

図5：乗船名簿1ページ目のヘッダー

図6はダウンロードした乗船名簿の一部で、一行目に“Miss Shimoda Lady”の記述がある。同年・同日のラブラドル号で大西洋を横断した日本人女性の記録はこの行と次の行だけである。

Part of Description	Name of Passenger	Age	Sex	Profession, Occupation of Parents	Place of Birth
	<i>Miss Shimoda</i>				
	<i>Lady</i>				

図6：乗船名簿(下田先生の箇所) p. 6

大西洋横断は通常は7～10日の旅程ということであり、ほぼ10日の船旅で下田先生はモントリオールに到着したことになる。

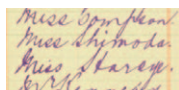
なお、モントリオールでの上陸記録が現時点では発見できていないが、到着日・船名などがはっきりとしたことから、これを糸口にさらに調査を進めたい。

「下田歌子先生傳」には、「……サア・トマス・バックストーン伯より国賓の待遇を受け……」との記載があり、現在この方向からの調査も実施している。

なお、ここまでで紹介した資料に関し、船の排水量や乗船者数などに差異が見られるが、その点については今回は言及しない。

一堀江義子について

両方の名簿を見ていて、下田先生の次の行の名前がどうしても気にかかる。図3の乗船記録簿の保存状態が良いので、そちらの綴りを見ると“Miss Horiye”と見えないこともない。ただし、最初の文字が“H”かどうか。図6の乗船名簿と比較すると一文字目は“H”であるようにも見える。このあたりが、オンラインでの画像取扱の限界であろうかとも思えるが、おそらく現物を見ても良く分からないのではないかなとも思える。



(図3拡大図)

往路で巴里までは同行が確認されている「堀江義子」については、前回紹介した Japan Weekly Mail で、綴りが“Miss Horiye”と記載されていることもあり、名前を変形させての検索を試みているが、なかなか思い通りの結果にたどり着けていない。また、帰国した際の Japan Weekly Mail の記述では「Miss Hori」と書かれた名前があり、堀江義子かどうか判別できていない。旅券に記載されていたアルファベットのふりがな(?)がどのようだったのかが分かればと思ってい

る。調査の対象となった各記録の下田先生の次の行の女性「Miss ○○○○○ Lady」については、私としては「堀江義子」である可能性を捨てきれないが、確定できないことは大変もどかしいところである。必ずどこかに正確な情報が残っていると思うので、さらに調査を進めたい。

下田先生が書かれた「欧米二州女子教育実況概要」によると、「……女友堀江義子巴里府の某塾に留学せしが為め……」とあり、堀江義子は視察旅行中常時同行していた訳ではないが、欧州にしばらく滞在していた様子である。下田先生の帰国に際し途中から同行したのであれば、堀江義子はこの世界一周教育視察において、重要な役割を果たしていた可能性も考えられる。今後、堀江義子についても、公的な記録等を探し調査を進めていく予定である。現在、堀江義子について行った調査の結果は下記の通りである。

- ③の記事には、丸亀藩御目付役堀江治武斉(通称権左衛門)の娘として、1862年に誕生との記載があるが、墓誌には平八郎の六女との記載があり確認を要するポイントである。
- 宮内省に入り、明治天皇の第9皇女泰宮聡子女王の御用掛となる。
- 1862(文久2年)8月8日生～1942(昭和17年)6月15日没享年79歳
- 墓所は多磨霊園 2区1種11側(現地確認済)

この中で特に気になるのは、丸亀藩の名称である。下田先生の良人であった下田猛雄氏は、丸亀藩出身ということであり、ほぼ同時期を生きた堀江義子とも何か接点があったのではと思われることからである。なお、墓所にお参りしたところ、ご供養をされている方がお出でのようなので、霊園管理事務所にお願いしご子孫の方と連絡がつけば幸いである。

一考察一

世界一周に関わる調査の進捗は遅々としている。既に100年以上が経っていることから、消失してしまった史料もあることかと思う。ただし、現在の情報化技術の向上により、日本も含め各国で行っている史料のアーカイブ化事業の進展にはめざましいものがあり、従前よりも各国アーカイブは徐々に収録データの充実が図られている。検索の都度出てくる資料の増加が感じられるような時代になっている。

本調査に関しては、19世紀ヨーロッパで始まった産業革命と社会の変化、そして日本における産業革命と社会の変化とが密接に関わった内容であり、周辺を見回すだけでも豊富な史料が発見できる。下田先生の教育に関わる活動も、社会の変化と密接に関わって進展してきている。下田先生の思想を理解する上でも、当時の世界と日本の社会情勢は、是非とも押さえておきたい事柄である。

研究所に配属になり一年間調査を試行してきたが、これまで「分からない」で看過されてしまっていた事柄も、現在では苦労はするが解明できることが分かってきた。次年度には、研究所職員だけでなく図書館職員も含め、その他の職員の情報調査技能向上を目的とした、課題解決ワークショップを開催することも研究所の活動として検討していきたいと考えている。

注：今回使用したデータベース・記事・記録等

※下田先生について

- ① Findmypast.co.uk(検索は無料、資料閲覧は有料)
- ② Library and Archives Canada が提供している“Passenger Lists, 1865-1922”

※堀江義子について

- ③ 「同志社談叢」32号(2012年3月1日)

皆様の思い出をお譲りください。

実践女子学園は、2019年（平成31年）に創立120周年を迎えます。それを記念し、学園は、「実践女子学園100年史」の補遺版である「実践女子学園120周年史（補遺版）」と「実践女子学園創立120周年記念写真集」を刊行する予定です。そのため、下田歌子研究所では、学園や下田歌子先生の事績がわかる資料収集に力を入れております。

卒業アルバムや当時使っていた教科書やノート、学生生活や校舎の写真など、卒業生の皆様の大切な思い出が学園史を作成するのに必要です。学園の歴史がわかる資料で、ご寄贈可能なものがございましたら、下田歌子研究所までご連絡ください。

卒業アルバムも昭和10年前後に作成されたものをいくつか所蔵していますが、戦争の影響で、学園の創立から戦後まもない頃までの資料はほとんど残されておられません。皆様から寄贈される資料やそれにまつわるお話が、知られざる学園史の貴重な手掛かりにもなりますし、財産でもあります。120周年の歴史を未来へ繋げるために、ぜひご協力ください。

◆資料ご寄贈の手順について

資料の受け入れに当たっては、その可否を判断させていただくことがございます。送付いただく前に予めご連絡をお願いいたします。お送りいただきました資料の返却は、受入可否にかかわらずご容赦いただいております。次の手順についてご理解の程何卒よろしくお願い申し上げます。

(1) 送付いただく前に、下記にご連絡ください。

連絡先 担当部署：実践女子学園 下田歌子研究所
電話& FAX：042-585-8945
Mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp
受付時間：8:45～17:00 ※土日祝祭日を除く

(2) 下田歌子研究所にご連絡いただきました後、①～④をご記入いただき、荷物（郵便、宅急便）にご同封ください。

- ① 卒業された年月、学科 ※覚えていらっしゃる範囲でお願いします。
- ② 卒業生のお名前（在籍された当時のお名前）
- ③ ご提供いただく方のご連絡先（電話番号、住所）とお名前
- ④ ご寄贈いただく資料や思い出のお話
※複数ある場合は、リストも添付いただけると助かります。

送り先 〒191-8510
東京都日野市大坂上4-1-1
実践女子学園 下田歌子研究所



『ニューズレター』No.06

発行：2016年2月29日 編集・発行所：実践女子学園 下田歌子研究所

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1 電話・FAX：042-585-8945 E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp

印刷：日野テクニカルサービス株式会社